

2013年正月家族旅行

右城 猛

1. まえがき

東日本大震災の1週間後に生まれた孫の祐希がもうすぐ1歳10ヶ月になる。見るもの聞くものに興味を示し、どんどん吸収していく。今の時期にいろいろなことを体験させてやりたい。そう思い、12月31日から2泊3日の日程で、祐希を連れて家族で大分に行くことにした。

大分と言えば別府である。しかし、旅行を決めたのが11月に入ってからであったため、正月期間中はどこもホテルがとれない。隣町の大分市のビジネスホテル法華クラブ大分に泊まることにした。値段が安くて大浴場があること、今年の9月に泊まった「法華クラブ仙台」がとて良かったためである。

行き先は、祐希が喜びそうな所を考えた。初日の31日は、九州自然動物アフリカンサファリパーク、元旦は高崎山自然動物園、大分マリンパレス水族館「うみたまご」、地獄巡り、そして最終日の2日は遊園地「ラクテンチ」に行くことにした。これは全て家内の提案である。

2. 八幡浜から別府へ

5時30分、まだ外が真っ暗な中、我が家を出発。高速道路を走って八幡浜港へ。

寒波の影響で積雪を心配していたが、全く問題なし。予定通り9時過ぎに八幡浜港に到着する。

10時15分発のフェリーに乗る。大晦日の帰省客か、九州への観光旅行かわからないがフェリーは満員状態であった。

寒波の影響で風が強く、海も荒れ模様。デッキに出ると強風で吹き飛ばされそう。



八幡浜港からフェリーで別府国際観光港へ



13時別府国際観光港に到着

3. 九州自然動物公園アフリカンサファリパーク

九州自然動物公園アフリカンサファリパークは、大分県宇佐市安心院町に存在する日本最大級のサファリパーク形式の動物園。安心院の草原に約70種1400頭もの動物が自然に近い状態で暮らしている。

ゾウ、キリン、ライオンなどが生息する動物ゾーンは、マイカーかジャングルバスに乗って見学することになっている。我々はマイカーで見学する。



最初のゲートを潜ると「クマ・山岳動物セクション」。羊(バーバリ Sheep)が、ジャングルバスに群がっていた。バスに乗っている見物客が餌を与えるためである。



ここには、アメリカクロクマも生息している。



2 つ目のゲートを潜ると、「ライオンセクション」。ここでは、10 年前に、20 年以上も飼育係をしていたベテランの職員が、ライオンに襲われて死亡するという事故が発生している。

ゲートを潜る度に、車から外には絶対出ないように、窓を開けないように、動物に襲われたらクラクションを鳴らすようにとアナウンスがあった。



ジャングルバスに群がるライオン。パトロールカーに乗った監視員が銃を持って常に監視。



3 番目は「草食動物セクション」。早速現れたのはファロージカ。



祐希 が大好きなグランドシマウマ。



シマウマとゾウ。



シカの群れ

けでなくグランドシマウマもいた。



最後は「レイヨウセクション」。レイヨウ(羚羊)とは、カモシカのこと。



アミメキリン。このセクションには、シロサイ、アメリカバイソンもいた。



4番目は「トラセクション」。最も美しいと言われているベンガルトラがいた。



ここには、フタコブラクダもいた。とても愛敬があっかわいらしい。



5番目は「チーターセクション」。チーターだ



動物ゾーンの出口。



次はふれあいゾーンに向かう。雪が降って寒い。



「ふれあいゾーン」にある正月飾りの前で記念撮影。



「ふれあいゾーン」にある「乗馬体験コーナー」で、帽子を被って馬に乗る。



馬の餌やりも体験する。馬の大好物のニンジンあげる。

4. 明礬(みょうばん)温泉



アフリカンサファリパークから別府に降りる途中にある明礬温泉に立ち寄る。

世界第二位の温泉湧出量を誇る別府八湯の中で最も標高が高い位置にあるのが明礬温泉。

江戸時代に全国一の明礬の算出を誇っていた。湯台場としても有名なところ。



わらぶき屋根の「湯ノ花小屋」の中。この小屋の中で湯ノ花が自然にできている。



わらぶき屋根の「湯ノ花小屋」が立ち並んでいる。



左が湯ノ花小屋，右の小屋は，湯ノ花小屋を模した家族風呂。温泉風情溢れた風景である。

5. 高崎山自然動物園

ホテルを9時30分に出発。ニホンザルが生息する高崎山自然動物園に行く。

1952年，高崎山の麓・寿寺別院の境内で野生のニホンザルの餌付け始め，それが軌道に乗った1953年に開園している。

私は，本山中学校の3年生ときに，修学旅行で高崎山に来た記憶がある。



2004年に開通した小型モノレール「さるっこレール」に乗って，寿寺別院の境内に上がる。



境内では餌付けの実演が行われていた。



餌やりが始まると，無数のサルが集まってきた。



餌やりを眺める見物客。見物客が足を広げて立っていると，その間をサルが通り抜ける。



寿寺別院の境内



国道 10 号線に架かっている横断歩道橋を渡って、水族館「うみたまご」に向かう。

6. 大分マリンパレス水族館「うみたまご」

この水族館は、高崎山自然動物園を手がけた元大分市長上田保の立案で 1964 年に開業。世界初の潮流式回遊水槽を実現した水族館で、開館から 7 年間は日本国内一の入場者を誇る水族館であった。

2004 年に 2.5 倍の規模に拡張してリニューアルオープンしている。



水族館「うみたまご」の入り口



水槽のアマゴに見入る祐希



無数のキビナゴの群れ。



大水槽の魚にはあまり興味を示さない。



興味があるのはキッズコーナー。



メインイベントのイルカショー。



ナマコやヒトデに触れるコーナー。

7. 別府地獄巡り

別府温泉は、別府八湯と呼ばれるように、「浜脇温泉」「別府温泉」「亀川温泉」「鉄輪温泉」「観海寺温泉」「堀田温泉」「柴石温泉」「明礬温泉」の八つの温泉よりなっている。

地獄巡りの場所は、鉄輪(かんなわ)温泉である。龍巻地獄、血の池地獄、かまど地獄、鬼山地獄、白池地獄、山地獄、海地獄、鬼石坊主地獄の8つの地獄を巡るようになっている。



最初に行ったのは龍巻地獄。キャラクターの鬼っ子が出迎えてくれ、祐希は大喜び。



龍巻地獄は間歇泉。30分～40分休止した後に

6分～10分噴出する。



噴出する間歇泉の前で記念撮影。



血の色をした「血の池地獄」で全員揃って記念撮影。



2つ目は、龍巻地獄の隣にある血の池地獄。



顔出し看板をパパと一緒に体験。はまりそう。



ここでもキャラクターの鬼っ子のお出迎え。



足湯も体験。



快調の祐希さん。



「血の池地獄」から次の「かまど地獄」に向かう途中の景色。湯煙の町「別府」を実感。



3 番目は「かまど地獄」



地獄の二丁目。



岩盤浴で足裏を暖める。



時期によって温泉の色が変わる。奥の温泉は海地獄のような青色。手前の温泉は血の池地獄のような赤色をしている。



グアムにあったのと同じ「幸福の鐘」



4 番目は鬼山地獄。



5 番目は白池地獄。祐希は疲れてきて「抱っこ」や「おんぶ」を連発しました。



6番目は山地獄。入り口を入ると祐希の好きなバナナがなっていた。



7番目は海地獄。閻魔大王のキャラクターがお出迎え。



熱帯植物園かと思ったらアフリカゾウがいた。



閻魔様と記念撮影。



カバもいる。まるで動物園。



全員揃って海地獄の前で記念撮影。



山地獄には温泉がない。地面のあちこちから湯煙が上がっている。



最後は鬼石坊主地獄。一休さんのキャラクターがお出迎え。動かないので人形かと思っていた。



ここが坊主地獄。白い粘土が液状化しているような温泉。



坊主地獄で温泉に入ってからホテルに帰る。祐希は疲れ切って歩く気力がなし。

8. ラクテンチ(3日目)



最後は別府の「ラクテンチ」。「楽天地」のこと。

家内は、小さいときに両親に連れられてここにきた記憶が残っているということであった。

1929年(昭和4年)に開業している。経営者は何度も代わっているが、80年以上の歴史を持つ老舗遊園地である。



30度の傾斜角を持つケーブルカーの乗り口。



山腹にある遊園地に到着。



シャボン玉を口から飛ばす「ドラえもん」がお出迎え。



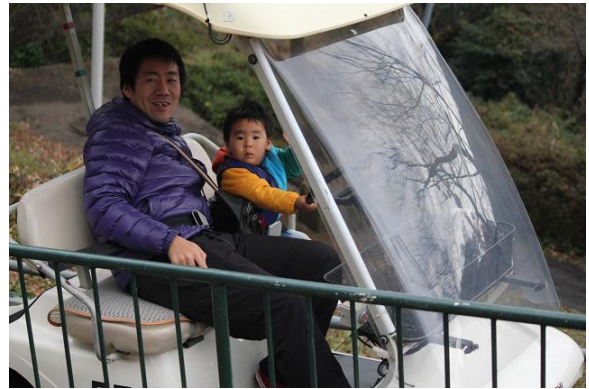
キッズコーナーがお気に入り。



キッズコーナーの乗り物が祐希には丁度合っている。



ママと一緒にアンパンマン列車を楽しむ。



ロマンスカー。森林の中に設けられた 400メートルのドライブコースを運転。でも祐希はかなり疲れ切った様子。



ママとおばあちゃんは、ロマンスカーの乗って上機嫌。



アザラシの乗り物「ウォーターパレード」に
ママと一緒に乗る。



続いてパパとも乗る。



11時30分から「ワンワンサーカスショー」。
捨て子の柴犬が2年間の訓練で玉乗りをした。



眠たくなったのか指をくわえる祐希さん。



ワンちゃんの縄跳び。



大好きな新幹線にパパと一緒に乗車。



別府国際観光港から14時発のフェリーで八幡浜港に帰る。船内は乗客で溢れていた。



船に乗ると祐希は元気を回復。2時間40分の船旅にもめげず、船内を走り回る。

9. 食事のこと

大晦日の夜

旅の楽しみの一つに食事がある。旅先で美味しい料理に出会えると嬉しい気分になる。

ホテル法華クラブの従業員の対応、朝食にはとても満足できた。しかし、このホテルにはレストランがなく、夕食を食べることができない。いつもであれば外で食べるので問題ないが、大晦日と元旦だけは別である。ほとんどの飲食店が休業している。そんな中、ホテルの隣の居酒屋が幸いにも営業していた。私が嫌いな全国チェーンの店ではない。地元の新鮮な魚を食べさせてくれるというので大いに期待していた。

出されたメニューに「豊後さば」、「豊後あじ」と書かれていた。大分と言えば、「関さば」「関あじ」と思い込んでいただけに気になった。この店で美味しい料理を期待できそうないと思えたのである。

刺身は比較的新鮮で「まあまあ」の味であったが、酒がまずい。芋焼酎のお湯割りを頼んだのであるが、薄すぎて飲めたものではない。

お湯の分量を言わずに頼んだのが悪かったと反省し、改めて日本酒の大吟醸1合を注文した。若い女性の店員が、1合升に入れたグラスに、一升瓶に入った日本酒を並々と注いでくれた。グラスに入りきらない日本酒が升にこぼれるのは普通であるが、こぼれた日本酒で升が満杯になったのは初めてであった。

この定員のサービスの良さに大いに感激した。さすが大分の女性は太っ腹と思ったのである。ところが日本酒はキンキンに冷やされていた。しかも味が薄い。よく考えれば、このような庶民的な居酒屋で大吟醸を飲む客は滅多にいないと考えるべきであろう。一升瓶の栓を抜いて何ヶ月も冷蔵庫に入れたままであっても不思議でない。

糖尿病の私にしてみれば、美味しい日本酒を少し飲んで満足したかったのである。

元旦の夜

昨夜の店で会計を済ませた際に二千円の割引券をもらっていたが、二度とこの店で食べる気はしなかった。せめて元旦の夜くらいは美味しい食事をいただきたいと思ったのである。

娘たちがネットで調べ、近くの「大分オアシスタワーホテル」のディナーバイキングを予約してくれたので、元日はそこで食事をした。

値段は昨夜の店と同じであったが、満足度は天と地の違い。雲泥の差があった。

特にズワイガニには感動した。食べ放題のカニでうまいものに出会った試しがない。北海道を旅したときにクーポン券で食べたカニは、まずくて食べられなかった。今年の夏、グアムのバイキングで食べたカニもまずかった。ところが、ここのズワイガニは身が詰まって、肉に甘みがあった。

牛肉、マトンも美味しかった。ワインは飲み放題であったが最高であった。